

実践研究

幼児を対象とした集団での遠隔運動遊び指導の方法：事例研究

宮田 洋之^{1) 4)}・辻川 比呂斗^{2) 3)}・熊倉 拓巳³⁾・小貫 凌介⁴⁾
吉田 兼太郎³⁾・黒川 優介³⁾・岸 秀忠³⁾・鈴木 宏哉^{3) 4)}

Online Class of Active Play for Preschoolers: Case Study

Hiroyuki MIYATA, Hiroto TSUJIKAWA, Takumi KUMAKURA, Ryosuke ONUKI,
Kentaro YOSHIDA, Yusuke KUROKAWA, Hidetada KISHI, Koya SUZUKI

はじめに

幼児期の教育現場である幼稚園・保育所・認定こども園等（以下、幼稚園等）において、保育環境は多岐にわたっている。幼稚園には「幼稚園教育要領」、保育所には「保育所保育指針」があり、行政管轄も分かれていることから、保育環境の差異や、教育の考え方が混在していると考えられ、運動指導環境に関しても同様である。森ほか（2004）は「保育の取り組み（形態）、保育者や園の運動に関する意識、幼児を取り囲む人的環境などが、幼児の運動経験の機会や運動能力の発達に影響を及ぼしている」と報告しており、全ての幼児に運動経験が促進される運動指導環境の構築が求められている。このような背景に加え、近年の子どもの体力低下に歯止めをかけるべく、行政、幼稚園等、家庭、地域社会が取り組むべき課題として、2012年に幼児期運動指針（文部科学省、2012）が策定された。幼児期運動指針は「幼児はさまざまな遊びを中心に、毎日合計60分以上楽しく体を動かすこと」を推奨し、その推進にあたり「多様な動きの経験」「楽しく体を動かす時間の確保」「発達の特性に応じた遊びの提供」の3つが重要であると述べている。これは、全ての幼児が十分に

体を動かす機会に恵まれているとはいえない現状を考慮し、保護者や幼稚園等の保育者等をはじめ、幼児に関わる全ての人々を対象に、幼児期の運動のとらえ方を共有するために発信されたものである。

幼児の運動経験促進のために、保護者を取り組み可能なこととして、降園後や祝日に公園等で遊ぶ時間を確保することや、子どもを習い事に通わせることが挙げられる。しかし、遊ぶ時間の確保に関して、核家族化の進行や、共働き家庭の増加により時間をとりにくくなっており（文部科学省、2012）、降園後の遊び場は、室内で遊ぶ幼児が半数近くを占めている（文部科学省、2011）。習い事に関しては、運動系習い事に通っている男児の体力発達に関連する報告（宮田ら、2021）がある一方、習い事に通わせるには経済格差が弊害となっている。鈴木（2015）は、運動・スポーツ環境の不自由さを認識し、対応できる家庭の子どもたちだけが、不自由な環境から脱却できている可能性があるとして述べている。さらに清水（2018）は、家庭・地域社会の社会経済的要因と機会不平等との結びつきを弱めることが必要であると述べているが、現時点で解決に至っているとは言えない状況である。したがって、子どもの体力低下問題の原因の1

¹⁾中京大学スポーツ科学部・²⁾順天堂大学保健看護学部

³⁾順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科・⁴⁾順天堂大学スポーツ健康科学部

つである運動経験の差、すなわち運動する子と運動しない子の二極化を防ぐためには、家庭および保護者に多くを求めるのではなく、家庭・地域の子育て拠点である幼稚園等に求められることが当然の流れといえる。

幼稚園等の運動指導環境は、行政管轄の差異以外にも、園の規模、地域、国公私立、教育方針等の違いにより、指導内容のみならず、実践する指導者も様々である。専任の専門家がいる園や、定期的に外部講師に委託している園がある一方、保育者が運動指導をしている園や、運動指導を行っていない園も存在している。春日(2008)が報告した「専門的なプログラムの必要性は十分に認識していても、いざ取り組みを開始しようとした時、何から手をつけてよいのかわからない」という保育者の実情も、幼児期運動指針を全ての幼稚園等に配布したことにより、大きな成果があったものと推測できるが、実際に指導を実行するには至っていないケースも多数報告されている。このような現状において、全ての子ども達が発達に即した運動経験ができていないか不明であり、運動動作が未習得状態の可能性があるため、多様な環境に住まう幼児のすべてに多様な動きの獲得できる、より具体的な運動の経験ができる場の構築が急務であると考えられる。

そこで本研究では、保育形態や運動指導者の有無に左右されずに「多様な動きの経験」「楽しく体を動かす時間の確保」「発達の特性に応じた遊びの提供」を可能にし、将来的に Society5.0 を見据えたユニバーサル運動支援策として、ICT を用いた遠隔運動指導を実践した。遠隔指導は、昨今の新型コロナウイルスの感染拡大防止による外出自粛により、大変注目されたキーワードの一つである。しかし、幼稚園等においては、ICT教育の推進自体遅れており、遠隔による指導がほとんど行われていないことから、幼児を対象に遠隔運動指導を実践し、効果的、効率的に展開できる方法の検証を目的とした。

対象と方法

本研究は、静岡県三島市の公立幼稚園に通う幼児62名(年少23名、年中11名、年長28名)と保育関係者5名(各担任3名、主任1名、園長1名)とした。調査に先立ち、静岡県三島市子ども保育課、スポーツ推進課、対象園の職員同意の上、保護者に対して本研究の目的、方法、提供者がこうむる恐れのある不利益について十分な説明を行ない、書面にて同意の意思を確認した。調査期間は令和2年度の8月1回(年中児のみ)、11月2回、12月1回の計4日間、各学年別に実施した。各回の参加人数は7名から28名であった。遠隔運動指導者と対象幼児は、遠隔運動指導実践開始の2か月前に一度だけ体力調査で対面しているが、その際運動指導は行っていない。なお本調査は、順天堂大学スポーツ健康科学部研究等倫理審査承認後に開始し、2020年度順天堂大学スポーツ健康科学部学内共同研究助成を受けて行なわれた。

遠隔運動指導方法および検証に用いた機材

遠隔運動指導には、オンライン会議システム「Zoom ミーティング(以下、Zoom)」を用い、リアルタイム型のオンラインで行なった。ZoomのURLおよびメール作成は研究責任者が行ない、対象園が普段外部との連絡に用いているPCへミーティングIDおよびパスワードをメールで送信した。対象園は、使用するデバイスでZoomを起動し、メールに添付されたミーティングIDおよびパスワードを入力し開催した。対象園は公立幼稚園であり、無線LANがないことに加え、安全性の観点から配信側が用意したPocket型wifi(UQ wimax2)を用い通信を行なった。

配信側で検証に用いた機材として、デバイスは2種類のPC(Lenovo ThinkPad:AMD E2-9000、Surface pro7:Core i5-1035G4)とタブレット端末(iPad pro11インチ:第2世代)および各デバイスを固定する三脚、マイク3種類(イヤホン型:Airpods pro、コンデンサーマイク:RODE Microphones VideoMic、会議用スピーカー:Anker

PowerConf) を検証に用いた。対象園で検証に用いた機材は、大型モニター (Funai50型)、PC (Lenovo ThinkPad : AMD E2-900)、タブレット端末 (iPad pro11 インチ : 第2世代) および三脚を用いた。

遠隔運動指導の評価については、各回の遠隔運動指導実践後にZoomにて反省会を行なうと同時に、保育関係者が指導記録を作成し「幼児のあrawれ」「反省考察」について自由記述で回答を得た。

遠隔運動指導内容および評価

遠隔運動指導の内容は、日本体育協会 (現日本スポーツ協会) が文部科学省から委託を受けて作成し、現在スポーツ庁も普及を推進している「アクティブ・チャイルド・プログラム」 (公益財団法人日本体育協会、2010) および「幼児期からアクティブ・チャイルド・プログラム」 (公益財団法人日本体育協会、2015) を参考に、遠隔運動指導でも実践可能であると判断した内容を用いた (表1、写真1、写真2)。

結果および考察

効果的、効率的に展開するための機材環境

遠隔運動指導配信側の機材環境について、PCのスペックはAMD E2-9000 : メモリ4GBのシステムでは、タイムラグが発生するなどスムーズに通信ができず、Core i5-1035G4 : メモリ8GBのシステムおよびタブレット端末では問題なく実践することができた。これはZoom公式サイトを基にした推奨CPU通りであった。マイクにつ

表1. 遠隔運動指導の内容

日付	年少児	年中児	年長児
8月6日		からだじゃんけん 忍者ゲーム	
11月17日	柔軟 模倣運動 オニごっこ	柔軟 忍者ゲーム 模倣運動 オバケが出たぞ	柔軟 からだじゃんけん 2人組遊び 大根抜き だるまさんが転んだ
11月24日	柔軟 忍者ゲーム 縄遊び	柔軟 忍者ゲーム ティッシュ遊び ねことねずみ	柔軟 2人組遊び 王様だるまさんが転んだ 大根抜き 集合ゲーム
12月15日	柔軟 忍者ゲーム まねっこ遊び 大縄遊び オオカミが出たぞ	柔軟 忍者ゲーム 足ふみオニ 子とろオニ	柔軟 2人組遊び 王様だるまさんが転んだ 短縄遊び



写真1. 遠隔運動指導の様子 (Zoom画面のスクリーンショット : まねっこ遊び)



写真2. 遠隔運動指導の様子（Zoom画面のスクリーンショット：だるまさんが転んだ）

いて、イヤホン型および会議用スピーカーでも実践できたが、不必要な雑音を排除し、より正確に声を届けるにはコンデンサーマイクが最適であった。配信側の收音にPCと接続可能なコンデンサーマイクを選択したことに加え、三脚に設置することが可能で、さらにZoomのURL作成からメール送信まで1台で実行できることから、最終的にタブレット端末として切り離して使用できるPCを選択した。なお会議用スピーカーは、近くの音を広範囲に收音できることから、遠隔運動指導中ではなく、反省会（保育関係者側）で重宝した。

遠隔運動指導受講側の機材環境について、配信側同様にAMD E2-9000：メモリ4GBのPCではスムーズに通信できず、PCより簡易的に設置可能であるタブレット端末を選択した。遠隔運動指導配信側は、受講側と違い、PCを用いなくてもタブレット端末で十分実践可能であることが分かった。

遠隔運動指導の評価

遠隔運動指導の評価について、保育関係者が作成した指導記録のうち「幼児のあらわれ」および「反省考察」について学年毎に表2、表3、表4にそれぞれ示した。その中から、遠隔運動指導を効果的、効率的に展開するための方法に関わる回答を「1. 環境設定」「2. 保育関係者との連携」の2つのカテゴリーに分類した。

1) 環境設定

環境設定として、遠隔運動指導者および幼児ともに、基本的には常に画面が見える場所を保

つ必要がある。したがって、カラーテープやマーカーを用い、両者ともに画面に姿を映すことができる限界地点を視覚的に定める必要があることが分かった。また幼児は興味関心の高さからか「画面に近づきすぎる」ことが挙げられ、安全面の配慮から遠隔運動指導者の話を聞く場所も指定することが必要であることが分かった。

“線が引いてあったことで、動く範囲が分かりやすかったように感じた。(11月17日年少)”

“鬼ごっこなどの経験も少なく、外で遊んでいても衝突することが多くみられるが、今回のように同じ方向に向かって走ったり跳んだりすると怪我也少なく取り組みやすいと感じた。(11月24日年少)”

“線から線へ移動する視覚的な動線を設けることで、移動しながら行なう運動に関して効率的に行なうことができる。(11月24日年少)”

“幼児がテレビ画面に近づいてしまい、幼児の姿がカメラに映らなくなることが度々あった。(8月6日年中)”

“夏期保育中のため、少人数であったが、20人以上で活動するときはある程度離れる必要がある。(8月6日年中)”

“カメラに映る範囲を把握し、テープなどで印をつけておくと良いのではないかと。(8月6日年中)”

以上のことから、図1のような環境設定が良いことが分かった。なお、運動指導の内容によって幼児の動線確保はこの限りでない。

表2. 遠隔運動指導の記録（年少児）

日付	幼児のあらわれ	反省考察
11月17日	<ul style="list-style-type: none"> 先生を覚えていて、TVに映る先生に挨拶したり手を振ったりする姿があった。 先生の呼びかけに答える姿がみられた。 	<ul style="list-style-type: none"> 線が引いてあったことで、動く範囲が分かりやすかった。 先生のことを知っていたため、幼児の反応が良かった。しかし、呼びかけに応じると先生の声が聞こえにくくなるため、その際は保育者の呼びかけが必要である。 8月の実践（年中児の検証）と違い、タイムラグがなく良かった。 広がる、集まる時は保育者が幼児に伝える必要がある。 内容を事前に知ること、初めての活動を不安に感じる幼児も参加できると思う。 実践した内容を普段の保育に取り入れていきたい。
11月24日	<ul style="list-style-type: none"> 遠隔運動教室がうれしくて、テンションが高くなって声が大きくなり、先生の声が聞こえなくなりました。そのため、保育者が先生の指示を繰り返して伝えた。 興奮しながらも意欲的に体を動かす姿が見られた。 大縄を使った遊びは2グループに分かれて行なった。嫌がる子もなく、全員が取り組むことができた。 	<ul style="list-style-type: none"> 鬼ごっこなどの経験も少なく、外で遊んでも衝突することが多くみられるが、今回のように同じ方向に向かって走ったり跳んだりすると怪我也少なく取り組みやすいと感じた。 3歳児にとって、遠隔のみの指導はまだ難しい。現場での指示や補助が必要である。 縄跳び遊びは保育の中でも取り入れていきたい。 線から線へ移動する視覚的な動線を設けることで、移動しながら行なう運動に関して効率的に行なうことができる。
12月15日	<ul style="list-style-type: none"> 先生が画面に映る前から興味を示して画面に注目していた。 画面越しでも褒められると、より画面に注目して話を聞こうとする姿が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> 始まる前に線よりテレビに近づかないよう声を掛けたが、活動に夢中になると近づいてしまう。 説明の時に画面越しでは分かりにくいこともあるため、教師がやりながら説明が必要なこともあった。 縄遊びや忍者ゲームをする中で、両足ジャンプを取り入れていきたい。 まねっこゲームを取り入れて様々な身体の動かし方を経験できるようにしていきたい。

表3. 遠隔運動指導の記録（年中児）

日付	幼児のあらわれ	反省考察
8月6日	<ul style="list-style-type: none"> TVに先生が映ったり自分たちが映ったりしている様子を見て、呼びかけに答えたり手を振ったりと、TVを通して通信していることを理解している様子が見られた。 体力測定で来園した先生のことを覚えていて、喜ぶ姿があった。 普段は一斉に体を動かす活動になかなか参加しない幼児も、様子が分かると少しずつTVに近づき、笑顔を見せながら体を動かして遊ぶ姿が見られた。 画面から消えたり現れたりする遊びをととても喜んでいた。 幼児がテレビ画面に近づいてしまい、幼児の姿がカメラに映らなくなることが度々あった。 	<ul style="list-style-type: none"> 知っている人の顔が映ることで興味を引き、どの幼児も楽しく参加することができたのだと思う。 短い時間であったが、TVに映る相手とやり取りすることは、これまで経験したことがない活動で、新鮮に感じ、楽しむことができたのではないかな。 夏期保育中のため、少人数であったが、20人以上で活動するときはある程度離れる必要がある。 タイムラグがあったので、音楽を使った遊びや、タイミングを合わせて行なうような遊びはうまくいかなかった。 カメラに映る範囲を把握し、テープなどで印をつけておくと良いのではないかな。

幼児を対象とした集団での遠隔運動遊び指導の方法：事例研究

日付	幼児のあらわれ	反省考察
11月17日	<ul style="list-style-type: none"> ・前回先生に褒められていた男児は、嬉しそうに行っていた（家でも母親に見せていた様子） ・初めて参加した幼児も最初は緊張していたが、先生が画面に映るとき付けになって見ていた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・一人ひとり褒めてあげることにより、さらに張り切って参加するなど自信をつけた様子だった。 ・活動が楽しくなり、幼児の動きが大きくなっていくにつれて、テレビからの音が聞こえづらくなるがあった。新しい遊びを行う際には、話を聞く時の合図を決め、その都度確認したり、近くにいる保育者が声がけしたりし、幼児が集中して話を聞く環境を作ることが必要である。 ・だるまさんが転んだなどの遊びも応用してできるのではないかと感じたため、普段の保育でも取り入れていきたい。 ・「広がりましょう」の声がけのみでは広がりきれないこともあるので、細かい指示は保育者が声がけする必要がある。
11月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・始まる前に前回の運動遊びの内容を振り返ると、行なったことすべてを幼児が覚えていた。「今日も忍者ゲームする？」などと期待感をもって参加する姿が見られた。 ・前回の内容に応用した動きが加わったことで遊びをより楽しんでいた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ティッシュというふわふわと動くものをキャッチすることは難しく、そこに楽しさを感じていたようだった。 ・少しずつ遠隔運動指導に慣れてきている様子である。
12月15日	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで経験したことのある遊びも、初めての遊びも楽しそうにやっていた。 ・ことろオニ遊びは、先頭の子によって動きが変ると感じた。前の人の肩に手を置くというルールは、その都度確認した方が良いと感じた（首を絞めない）。 	<ul style="list-style-type: none"> ・初めての遊びも抵抗なく参加することができていた。一方、口頭だけの説明では幼児が理解しきれない場面もあり、その際のフォローや、動きを実際に見せるの必要性を感じた。 ・遠隔運動遊びと対面運動遊びどちらが好きか聞くと、ほとんどの幼児が後者を選ぶ子が多かった。その理由は「一緒に遊べるから」と答えたことから、画面を通してよりも直接目の前で一緒に体を動かした方が、幼児も一緒に活動している（遊んでいる）感覚になるのではないか。

表 4. 遠隔運動指導の記録（年長児）

日付	幼児のあらわれ	反省考察
11月17日	<ul style="list-style-type: none"> ・「先生だー」とすぐにTVに近づく。 ・言葉の指示に対し、理解できた子はすぐに動くことができた。 ・夢中になると画面を見なくなることがあり、先生が画面からいなくなったことに気づかないこともある。 ・だるまさんが転んだは、回数を重ねることでゆっくり進む子が増えたが、夢中になるとスピードが出たり、線を越えてしまったりした。 ・大根抜きで手をグーにして力を入れることが難しい幼児もいた。 ・緊張感や真新しさがあり、全体的に子どもたちの反応速度は速いと感じた。 ・自分が映っている映っていないに関係なく、幼児は夢中になって遊ぶ姿が見られた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・28人全員は一斉に映ることが難しい。 ・線に並ぶ際、どちらをわかるように線の色を変えておく必要がある。 ・話を聞くために線に戻ることがあったが、線に戻らなくても幼児は話を聞くことができたのではないか。 ・細か指示や、動くために間隔をあけるなどの教師の手助けは必要不可欠。 ・TVの音量を50に上げた。 ・受け身になってしまっていたが、前回の運動遊び後の幼児の様子などを先生に発信できるような時間もあるとZoomでやり取りしているという楽しさを更に感じることはできたのではないか。

日付	幼児のあらわれ	反省考察
11月24日	<ul style="list-style-type: none"> ・参加人数が少ないことに加え、1週間ぶりということでも話を聞くのが上手だった。 ・ジャンケンでは体でなく手でやっている子がいた。王様だるまさんでは、指示を聞いてずっと回っている子がいた。 ・チーム分けは遠隔でも十分行うことができた（2チーム分け）。 ・大根抜きは、すぐに抜かれてしまう。ルールが理解できていないように感じた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・体ジャンケンでは動きの分からない幼児もあり、何度か楽しむ経験をしたが、ジャンケンでの動きの確認をしておくとう良かった。 ・だるまさんは上手にできた。ただし、具体的な指示がないと動きを続けるので、詳しい指示の必要性を感じた。 ・大根抜きでは、保育者の指示があれば幼児だけでも隊形を整えることができると感じた。
12月15日	<ul style="list-style-type: none"> ・話を聞く際に集まる、ということが浸透していて、話を集中して聞くことができる子が増えてきた。 ・「見てほしい」という思いが強く、前に前に出てこようとする幼児がいる。 ・柔軟では、体の使い方が苦手な子が良く分かる気がする。 ・2人組遊びを楽しみにしており、新しい遊びにも挑戦してみようという気持ちが見られたが「サイクリング」は難しかった。 ・王様だるまさんが転んだは、保育者と何度か遊んでいたもので、すぐに動くことができていた。 ・振り返りの中で何が一番楽しかったか聞くと、縄跳びという答えが返ってきた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つま先で跳ぶ、という動きが難しい動きだということが分かった。普通の遊びの中でのジャンプでも意識してみたい。 ・2人組の遊びはすき間の時間などでも楽しんでできたので、教えてもらった新しい遊びも引き続き楽しんでいきたい。また、保護者にもおすすめと伝えたので、家庭での様子を幼児に聞いてみたい。

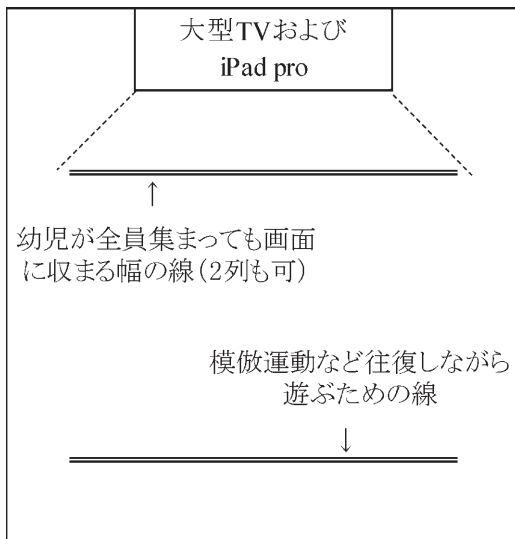


図1. 遠隔運動指導受講側の環境設定

2) 保育関係者との連携

本来、運動指導を実践する場合、当然ながら運動指導者が現地にて対面で指導するのが通例である。しかし今回は、画面越しからの遠隔運動指導であるため、指導案を作成し、指導内容を予め現場の保育関係者と共有してから実践し

た。これは、どのような流れで、どんな活動内容なのかを把握するためであり、安全面の配慮からも必要なことであると容易に想像できる。したがって本書では、その他の視点から保育関係者との連携の必要性が述べられたものを報告する。

“先生のことを知っていたため、幼児の反応が良かった。しかし、呼びかけに応じると先生の声が聞こえにくくなるため、その際は保育者の呼びかけが必要である。(11月17日年少)”

“内容を事前に知ることによって、初めての活動を不安に感じる幼児も参加できると思う。(11月17日年少)”

“広がる、集まる時は保育者が幼児に伝える必要がある。(11月17日年少)”

“遠隔運動教室がうれしくて、テンションが高くなって声が大きくなり、先生の声が聞こえなくなってしまった。そのため、保育者が先生の指示を繰り返して伝えた。(11月24日年少)”

“3歳児にとって、遠隔のみの指導はまだ難しい。現場での指示や補助が必要である。(11月24日年少)”

“説明の時に画面越しでは分かりにくいこともあるため、教師がやりながら説明が必要なこともあった。(12月15日年少)”

“活動が楽しくなり、幼児の動きが大きくなっていくにつれて、テレビからの音が聞こえづらくなることがあった。新しい遊びを行う際には、話を聞く時の合図を決め、その都度確認したり、近くにいる保育者が声がけしたりし、幼児が集中して話を聞く環境を作ることが必要である。(11月17日年中)”

“「広がりましょう」の声がけのみでは広がりきれないこともあるので、細かい指示は保育者が声がけする必要がある。(11月17日年中)”

“初めての遊びも抵抗なく参加することができていた。一方、口頭だけの説明では幼児が理解しきれない場面もあり、その際のフォローや、動きを実際に見せる必要性を感じた。(12月24日年中)”

“細か指示や、動くために間隔をあけるなどの教師の手助けは必要不可欠。(11月17日年長)”

以上のことから、遠隔運動指導を効果的・効率的に展開するためには、保育関係者との連携が重要であることが分かった。また月齢が低い学年、特に年少児においては、認知発達の側面から、説明を理解して行動に移すことが容易でないため、現場の保育関係者の協力は必須であると言える。

今後の課題

保育関係者が幼児に「遠隔運動遊びと対面運動遊びどちらが好きか」と質問したところ、ほとんどの幼児が対面運動指導を選び、その理由を「一緒に遊べるから」と答えた。保育関係者はそれを「画面を通してよりも直接目の前で一緒に体を動かした方が、幼児も一緒に活動している(遊んでいる)感覚になるのではないかと考察した通り(12月15日年中)、対面運動指導によって一緒に体を動かして遊ぶことが何より楽しいということは想像に容易い。しかしながら、2020年初めに世界的に拡大した新型コロナ

ウイルスに対応し、新しい生活様式の中で子どもの健全な発達を促すためには、本研究の発展は非常に有意義なものになると考える。遠隔運動指導の普及に向けた今後の課題は、子どもの体力発達に影響を及ぼす身体活動量に着目し、遠隔運動指導を受けた幼児の身体活動量を明らかにすることである。普段の日常保育の身体活動量や、対面指導を受けた幼児の身体活動量と比較し、遠隔運動指導の実態を明らかにする必要がある。

また、その他注目すべき回答として、遠隔運動指導で経験した内容を普段の保育で生かしたいといった回答も多数みられた。

“実践した内容を普段の保育に取り入れていきたい。(11月17日年少)”

“縄跳び遊びは保育の中でも取り入れていきたい。(11月24日年少)”

“縄遊びや忍者ゲームをする中で、両足ジャンプを取り入れていきたい。(12月15日年少)”

“まねっこゲームを取り入れて様々な身体の動かし方を経験できるようにしていきたい。(12月15日年少)”

“だるまさんが転んだなどの遊びも応用してできるのではないかと感じたため、普段の保育でも取り入れていきたい(11月17日年中)”

“つま先で跳ぶ、という動きが難しい動きだということが分かった。普段の遊びの中でのジャンプでも意識してみたい。(12月15日年長)”

“2人組の遊びはすき間の時間などでも楽しんできたので、教えてもらった新しい遊びも引き続き楽しんでいきたい。また、保護者にもおすすめと伝えたので、家庭での様子を幼児に聞いてみたい。(12月15日年長)”

遠隔運動指導の実践は、幼児への直接的な運動経験の提供だけでなく、運動の日常化へ向けた保育者関係者へのアプローチとしても有用な手段となる可能性を見出すことができた。今後の発展に向けて、実施を繰り返し、さらなる知見の蓄積が必要である。

まとめ

幼児を対象とした遠隔運動指導は、機材環境および指導環境を整え、保育関係者と情報を共有することで効果的・効率的に実践できることが分かった。今後の遠隔教育システムの構築、そしてユニバーサル運動支援策の一助にするため、さらなる研究の実施および検証の推進が求められる。

引用文献

- 春日晃章 (2008) 子どものゆとり体育を育む英才教育. 子どもと発育発達, 5 (4), 208-211.
- 公益財団法人日本体育協会 (2010) みんなで遊んで元気アップ! アクティブ・チャイルド・プログラム.
- 森司朗・杉原隆・吉田伊津美・近藤充夫 (2004) 園環境が幼児の運動能力発達に与える影響. 体育の科学, 54 (4), 329-336.
- 鈴木宏哉 (2015) 子どものスポーツライフ・データ 2013 (SSF 笹川スポーツ財団) 調査の特徴と可能性. 体育の科学, 65 (7), 497-504.
- 文部科学省幼児期運動指針策定委員会 (2012) 幼児期運動指針.
- 清水紀宏 (2018) 子どもの貧困と体力・スポーツ格差. 子どもと発育発達, 16 (1).
- 宮田洋之 (2021) 幼児の生活習慣および保護者のサポートが体力発達に及ぼす影響. 東京福祉大学・大学院紀要, 11 (1)
- 公益財団法人日本体育協会 (2015) 幼児期からのアクティブ・チャイルド・プログラム.
- 文部科学省 (2011) 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書.

